『世界の日本語教育』1, 1991年3月

日本語教育と敬語
主として敬語回避の観点から

宮崎里司*

キーワード：敬語回避，ストラテジー，内的場面，接触場面i インターアクション

要旨

敬語の機能は，はたして敬意伝達の強化だけであろうか．敬語は，ある場面の参加者同士の距離の調節のために使われるが，その際，敬意を強化する機能とは逆に，さまざまな理由(親密度，文の構造上の問題など)から限定し，回避する場合もある．この二面性の認識は，これからの日本語教育で敬語論を扱う上で，非常に重要である．

しかしながら，従来の研究(敬語の誤用分析など)は，敬語の訂正過程 (process) や，内的場面および接触場面での参加者 (とくにネーティブスピーカー) の敬語行動の問題に関心が薄く，十分分析されてこなかった．敬語の機能の二面性に注目する場合，とくに学習者の日本語習得のためのモデルの面から敬語行動をさらに分析していく必要がある．

以上のことから，本稿は，敬語限定使用の代表的な例である敬語回避(敬語表現の訂正)に注目し，内的場面および接触場面でのネーティブスピーカーの敬語回避行動の変容を言語訂正およびコミュニケーション・ルールの面から分析したものである．さらに，習得モデルとしてのネーティブスピーカーの敬語回避を，どのように日本語教育に取り入れていくかについても考察した．

はじめに

近年，敬語を静止的な体系や，狭義の敬語理論からのアプローチだけではなく，ディスコース(談話)分析や言語行動の観点から広く研究すべきであるという意識が高まっている (林，1973；南，1974，1977；杉戸，1983)．これは，弁別的特徴のある文法項目のみをその研究対象とし，言語と社会の相互関係を考察しなかった従来の構造主義言語学に対する強い反省からきた傾向だと思われる．

日本語教育においても，伝統的な文法的敬語教育至上主義への反省から，敬語をコミュニケーション教育，さらにはインターアクション教育の中で教えるべきであるという意識が強くなりつつある．中でも，ネウストプニーは，言語訂正理論[1]からのアプローチにより，敬意を限定する

* MIYAZAKI Satoshi：モナシュ大学 (Monash University, Australia) 日本研究科講師．

[1] 訂正理論については，他に B. H. Jernudd and E. Thuan (1983) に詳しい．

ための敬語回避行動や，その行動過程の重要性を指摘している(ネウストプニー，1982a，1983). こうした研究の背景には，従来の敬語生成(文法，語彙など)を中心とした狭義の言語能力だけをシラバスの中に入れることへの強い疑問がある.

それでは，外国人学習者が接触場面(異文化間コミュニケーション場面)で，回避も含めた本当の敬語運用能力を習得するためには，どのような日本語教育をめざすべきであろうか. そのためにも，今後接触場面での外国人話者の敬語回避行動についてさらに研究を続けていかなければならない[2].

しかしながら，外国人話者の敬語の回避行動を考える場合，ネーティブスピーカーの敬語回避の変容にも注目する必要がある. これまで，内的場面(日本人同士のみの場面)と接触場面では，ネーティブスピーカーの使うコミュニケーション・ストラテジーやそれに基づく規則が異なることは，多くの研究者によって指摘されてきた(田中，中畠，吉川，1983；Skoutarides，1986；Ozaki，1986)が，なぜ違うのか，またそのストラテジーを日本語の習得のためのモデルとして，どのように日本語教育に応用できるかについては，依然基礎研究が足りないといえよう。

本稿は，学習者の日本語習得モデルという観点から，内的場面および接触場面でのネーティブスピーカーの敬語回避行動を，主にインターアクションの面から調査および分析したものである. さらに，日本語教育とくに教室場面で，どのように敬語回避能力を習得していくかについても併せて考察した.

1. 調査方法

本稿は，以上のような研究目的から内的場面および接触場面での参加者(ネーティブスピーカーおよび外国人話者)が，どのように敬語回避を行っているか，またインターアクションの違いが，それぞれの参加者の敬語回避行動にどう影響するのかを分析した.

外国人話者として30代のオーストラリア人女性1名(A1)，同20代の男性1名(A2)と，ネーティブスピーカーとしてメルボルンに住む50代と20代の日本人男性(J1，J2)を1名ずつ選んだ[3]. そしてその中からオーストラリア人2名，日本人2名の4人の組合せを1組(A1，A2，J1，J2)，オーストラリア人1名，日本人1名の組合せを2組(A1，J1 及び A1，J2)，さらに日本人同士の組合せを1組(J1，J2)作り(表1)，20分から30分程度の短い会話をしてもらった. この会話の模様は録音，録画され，さらに調査者が，この会話のすべての場面を観察した. 会話終了後，録音内容を文字化し，ついで参加者の接触場面での敬語訂正行動の意識を調べるため，全員にフォ

[2] 内的場面(internal situation)と，接触場面(外国人場面)(contact situation)については，ネウストプニー(1981)を参照.

[3] 被験者となった外国人は，それぞれ在日経験が通算2年以上あり，とくにA1は，通訳の資格もある.

表 1 場面と参加者の組合せ

場　面	参　加　者
内的場面	J 1, J 2
接触場面 1	J 1, J 2, A1, A2
接触場面 2	J 1, A1
接触場面 3	J 2, A1

ローアップ・インタビュー (Neustupný, 1990) を行った.

2. なぜ敬語を回避するのか

ネーティブスピーカーの敬語回避の問題を考える場合，南の「敬語不使用の種類」のモデル(南，1987: 143)，およびネウストプニーの訂正（ネウストプニー，1982a, 1983) 理論からのアプローチが，多くの示唆を含んでいる．南は，ネーティブスピーカー(敬語使用習熟者)が意図的に敬語を使わない場合の表現効果として，近づき，軽卑，曖昧，文体的習慣などを列挙しているが，これは，「話し手がある場面での敬語使用を，不適切(あるいは望ましくない)」と判断し，生成過程をひとつ前の段階に戻して事前訂正 (pre-correction) する手続きに基づいて行われる(ネウストプニー，1982a)．例えば一度生成した敬語を，過剰敬語(不適切な敬語使用)だと判断し，発話する前に訂正することなどがこれに当たるだろう．

今回の調査でも，ネーティブスピーカーは，談話の中で「不適切」だと判断した丁寧さを回避しながら，相手との距離をうまく調整しコミュニケーションを行っている．

(下線部は回避された部分の一例)

(内的場面　参加者：J1, J2)

J1：で，J2 さんは，こちらご家族といっしょに．．．(おいでになられたんですか)

J2：いやぁー，わたくしは一人なんですよ．

ここで，J1 は，J2 の協力を得て，発話を途中で中断することにより，述部の敬語集中度を下げている．

このように敬語回避は，内的場面での敬語に関する重要な機能の一つであり，お互いの距離の調節に不可欠なものである．これは，外国人学習者にとっても，敬語の運用能力の面から当然日本語習得のためのモデルにすべきではないだろうか．

3. 内的場面でのネーティブスピーカーの敬語回避

広い意味でのコミュニケーション行動を調べる場合，まずその行動がどんな場面で行われるかというコミュニケーション・ルールについて考察しなければならない (Hymes, 1972；ネウストプニー，1979, 1982b). この概念は，日本語教育においても重要であるが，とくに内的場面と接触場面を厳密に区別して，そこで起きるコミュニケーション問題を扱う場合には不可欠なアプローチである.

3-1. 回避ストラテジー

ここでは，ネーティブスピーカーの敬語回避行動を比較するために，まず内的場面での敬語回避のストラテジーを調査した. 今回の調査で，さまざまな敬語回避ストラテジーが見られたが，ネウストプニー (1983：63-64) によって引き出された，五つの敬語回避のストラテジー (1～5) と，(6～8) の新たな回避ストラテジーが確認された.

1. 敬語の集中度が高い述部を避けると，敬語の一部が回避できる (5 例)

   (1) J2：(ご家庭でも練習なさっていらっしゃるんですか.)

   → ご家庭でも練習なさって....(相手のターンを待つ)

2. 敬語のレベルの低い表現を意図的に使うと，敬語が回避できる (8 例)

   例えば，相手に，疑問文で直接質問するのは，あまり丁寧ではないのでそれをわざと使ったり，文末に終助詞をつけるなどして敬意を下げる.

   (1) J2：うちに帰って来るのが 11 時なんですよ.

   J1：あー，疲れますよね.

3. 敬語は談話の一単位の中で一度しか使わない傾向があるので，談話の密着性が増したとき，または後続敬語，あるいは補助敬語動詞を回避する (4 例)

   例えば，「～(の)方」という言い方によって，後続敬語を低い敬語にかえることができる.

   (1) J1：(教会の人と親しくさせていただいて,)

   → 教会の方と親しくさせてもらって

   (2) J1：ほぉと，日本の各地から (J1：はい) 先生方を集めて...

   →(...集められて / お集めになって)...

   なお，この「～(の)方」は，相手の発話の一部を引用する場合に，繰り返しを避ける目的で使われる場合がある.

   (3) J2：え，あの，一応ノン・サラリーでやっていただくってことで

   (J2：あ，ノン・サラリー)えー.

J1： で，そういう方の応募は...

4. 目上の談話参加者が発話に直接関係しないと，敬語が回避できる（5例）
例えば独り言をいう場合や，一般主語で置き換える場合など

(1) J2： アドバイザーというのはふさわしくないかな
（終助詞や間投助詞を使う）

(2) J1： ダンス教室行きまして
J2： ほぉー.（感動詞を使う）

5. 高い敬語を要求する動詞から低い敬語のある動詞へスイッチすることによっても，敬語が回避できる（1例）

J2：（お伺いしたんですけれども）
→お聞きしたんですけれども

6. 敬語を使っても，敬意がうまく伝わりにくい時には，別の表現に切り替える
例えば，代名詞を使うと敬語の少なくとも一部が回避できる（1例）

J1： じゃ，私もまたトライをして（笑いながら）...
J2： やぁ，そんな，あれですよ．そんな，なんというか...

ここで，J2は，あれという発話意図について，「（トライするほどのものではないので），おやめになったほうがいいですよ」というようなものであったと報告している．

7. 非言語行動を，敬語の代わりに使うと敬語が回避できる（1例）
ソフトな話し方や笑い，または「スー」という間投音（吸気の無声摩擦音）などを使う．

J2： ...新聞の夕刊にうちの記事が載ってましたよ．
J1： そうですか，じゃあとでちょっと...（笑いながら），スー．

J1は，「ちょっと...」のあとで，おそらく「見せていただきましょう」という発話を考えていたと説明した．南（1973）は，こうした非言語行動を「随伴行動」と呼んでいるが，これは，ネーティブスピーカーの敬語回避行動に現れる特徴といえるだろう．

8. 短縮された敬語を使うことによっても，敬語はある程度回避できる（2例）

J1： 断わる先生も（いるんですね / いらっしゃる）→いるんすね

なお，J1は接触場面でもこのストラテジーを使っている．

（接触場面 1 参加者：J1, J2, A1, A2）

J1： え，一人ね，アメリカ人の先生も（いらっしゃって）→いらして

今回の調査では，内的場面での参加者が二人だけであったが，参加者が三人以上になった場合の回避ストラテジーも検討する必要がある．吉岡（1988）は，三人以上の参加者が構成する内的場面での，親しい者同士の談話行動の中に，敬語回避行動がみられると指摘している．初対面の目

上の人との談話進展を敬遠し，友人同士で話題を進展させる場合がそれにあたるが，これは，親疎の要素がネットワーク形成に影響を与え，発話者が，その聞き手(または発話の受け手)を替える顕著な例である[4].

こうした行動も，内的場面で現われる回避ストラテジーとして視野に入れなければならないだろう.

3-2. 敬語の事後訂正

接触場面での，外国人話者が起こすコミュニケーション問題の一つに，敬語の事後訂正がある. 例えば，外国人話者が「～先生の家，あの，お宅に...」といったような事後訂正をすることに対して，多くのネーティブスピーカーは違和感をもち，否定的な評価を下す可能性がある. しかし，今回の調査から，ネーティブスピーカーも敬語の事後訂正を行うのではないかと考えられる例が得られた.

(内的場面　参加者：J1, J2)

J2：え，もう限らないですよ. なん，日本語の先生，英語の先生，もう何でも.

J1：あー，何でも

J2：何でもなんていったら，あれですけど，え，どなたでも，来ていただくってことで.

J2 は，自分との関係が強いグループについての話題であったため，とくに意識して敬語表現を使わなかったが，J1 が J2 の発話を繰り返した (J1：あー，何でも) ことで，初めて「不適切な表現」であることに気づいた. そこで，「～ていったら，あれですけど」と，前の表現を打ち消しながら，どなたでもと事後訂正している.

ここで J2 は，「...なんていったら，あれですけど，...」とじつにうまくぼかしながら，訂正をしている. この訂正の意図に関して，今回 J2 から十分な報告を得ることはできなかったが，ネーティブスピーカーの事後訂正の特徴として，この「ぼかし」は興味深い.

今回は，限られたデータであったため，敬語の事後訂正のストラテジーについて，十分言及することはできなかった. 今後は，どんな場面で事後訂正をするのか，できるとすればどのように訂正するのか，また外国人話者の事後訂正の違いなども射程に入れた研究を進めていく必要がある.

4. 接触場面でのネーティブスピーカーの敬語回避ストラテジー

3. では，内的場面における敬語回避について述べたが，場面によるネーティブスピーカーの敬

[4] ある場面の参加者による，会話の順番取りシステムについては，山崎，好井(1984)に詳しい.

語回避がどのように変容するのかという点から，ここでは，接触場面での回避について言及したい．今回の両場面での敬語回避分析から，被験者となったネーティブスピーカーは，話題に上った第三者に対して使用する敬語動詞に関して，明らかに異なった意識をもっていることが分かった．例えば内的場面と接触場面で，J1 と J2 は次のように発話している．

(内的場面　参加者：J1, J2)

A　J2 to J1：牧師さんの，その，ゆっくり話してくださるでしょ (J1：えー，えー)

B　J1 to J2：それから，10時，11時まで，もう，いろいろね，勉，あの研究っていうかね (J2：はい)，仕事される先生もいらっしゃる．．．

(接触場面 3　参加者：J2, A1)

A　J2 to A1：．．．こういった先生にはあまり・(A1：会ってない.) 会ってなかったなという感じがしましたね．

J2 は，ここで，補強発話としての，A1 の「会ってない.」がなければ，「お会いしていなかった」というような表現を使いたかったと報告している．これは，相手の補強表現に合わせたものであるが，J1, J2 とも，接触場面では，敬語表現も含め，相手に合わせるように話したり，またはむずかしい敬語表現を使わないなどの意識があったと報告している．J1, J2 の内的場面および接触場面での敬語使用状況を比較すると，とくに J2 は，接触場面で敬語を回避していることがわかる (表 2)．

表 2　J1, J2 の内的場面および接触場面での敬語使用状況

敬語動詞の用例	A		B	
	J1	J2	J1	J2
～てくださる		1		
～される	1	2		
～ていただく	1	1	1	
～ていらっしゃる	1	1	1	
お　～する			1	1
おっしゃる		1		1

A：内的場面　B：接触場面 1～3

さらに接触場面 1 (参加者：J1, J2, A1, A2) で，J2 は，他の参加者と比べ，発話回数が極端に少なかった (表 3 参照)．これについて，J2 は，フォローアップ・インタビューで，目上の日本人が参加していたので，発話量を多くする(しゃべりすぎる)ことは，かえって不適切であると判

断したためであると報告している[5]．またこの場面での，A1, A2 のコミュニケーション行動について，ややしゃべりすぎであったとも見ていた．しかし一方で，A1, A2 は，J2 の行動について，積極的に会話に参加せず，非協力的だったという感想をもっていたことが，フォローアップ・インタビューにより明らかになった．

表 3 参加者ごとの発話回数

参加者	J1	J2	A1	A2	計
発話回数	73	12	52	60	197
全体の割合	37.1%	6.0%	26.4%	30.5%	100%

これは，コミュニケーション・ルールの点火のルールに対し，ネーティブスピーカーと外国人話者が別々の解釈をしていたという好例であろう．敬語回避（または発話量の抑止）が，敬意の限定のみならず，敬意を強化する機能を果たす場合も考慮に入れないと，お互いの言語行動を不適切なものと判断してしまう場合がある．敬意伝達の強化を意図した，こうしたネーティブスピーカーの発話量の調節の正しい解釈も今後日本語教育の中で扱われるべきである[6]．

5. 場面による規範の違い

以上，3. および 4. で，内的場面と接触場面での，ネーティブスピーカーの敬語回避行動の違いについて述べてきた．では，なぜこのように違うのであろうか．

その主な原因としては，外国人話者にはコミュニケーションの問題を見分けたり，その解決に協力できる能力が低い（ターンしてほしいところでしない，または先取り能力が低いなど）と判断し，内的場面とは異なった規範 (norm) を応用するからである．規範とは，あるコミュニケーション場面において，話し手が「正しい」と判断した規則をいう (Richards, 1982; Neustupný, 1985) が，例えば，方言で話すか，スタンダードな話し方にするか，または敬語で話すか，インフォーマルな話し方にするかなどは，話し手が何を規範とするかで決まる．

今回調査した接触場面で，J2 が，敬語の使用を限定していることから，ネーティブスピーカーは，場面によって，明らかに使用する規範を限定したり，変えたりしていることが分かる．これは，接触場面で観察される敬語回避（または敬語回避をしない）行動のいくつかが，対外国人用の

[5] なお J2 は，J1 がフォーマルな服装（背広着用）をしていたことも，こうしたストラテジーを使った間接的な原因であったと報告している．これは，ある場面の他の参加者の（非）言語行動を規定する，独立行動（南，1973）の一つである．

[6] 水谷（1989）は，日本語教育における待遇表現指導では，言わないですませることが丁寧な場合もあるという認識を持たせる重要性を指摘している．また，南（1981）の言い控えに関する研究もあわせて考察する必要がある．

話法(フォリナートーク)に起因するものであり，内的場面で応用する回避ストラテジーとは大きく異なるからである．つまり，外国人学習者は，接触場面でこうした「内的場面とは異なった，ネーティブスピーカーの敬語行動」しか観察できない可能性がある．ある意味で，回避という「見えない」言語行動の習得が，他の(非)文法行動と比較して，学習者の意識に上らない原因の一つがここにある．

6. 接触場面での外国人話者の敬語回避行動

今回の調査で被調査者となった外国人話者は，かなり上級の日本語能力をもっていた．その中でも，A1 はとくにコミュニケーション能力が高く，いくつかの敬語回避ストラテジーを習得していることが分かった．

(接触場面 3　参加者：J2, A1)

(1)　J2：　...さんでしょ．

A1：　じゃなくて，その方は，あのあたしもよく会いましたけども...

(2)　J2：　私は非常に，あの (A1：ん) 勉強になりましたね．

A1：　そうですか．どんな点で...(御勉強になったんですか)．

(2) で，A1 は「ご勉強」にするか，「お勉強」にするか迷ったが，J2 に対しては，やや丁寧すぎる表現であることと，一度使ってしまうと，いつもモニターしなければならないと判断し，意識的に敬語を含む述部を回避したと報告している．

(接触場面 1　参加者：J1, J2, A1, A2)

(1)　A2 to J1：　...やっぱり，　も，　自分の両親とオーストラリアに対しての態度が

(J1：はー) (A1 を見ながら) 変わってくるかなぁという...

A2 は，フォローアップ・インタビューで，ここでは，意識的に敬語を回避したのではなく，集中していなかったと報告しているが，結果的に自分の発話を A1 に向けることにより，敬語が回避されている．しかし，A2 のこうした行動が，意識的な敬語回避でないことは，次の例によく示されている．

(2)　A2 to J1：...それで，オーストラリアのことしか知らない日本人の子どもは，その先入観を受けるでしょうかなぁ．

外国人話者の中で，今回の被験者の A1 のように，かなりの回避能力をもっている者は残念ながら多くない．一般的に，敬語がうまく使えるといわれる外国人話者に共通していえることは，敬語そのものについての知識(文法知識)はもっているが，談話の中でどう使うか，またはどんな時に使わない方がよいのかについては，未習得な部分が多い．

(接触場面 1　参加者：J1, J2, A1, A2)

A1 to J1：あの，英語を話す機会はありますか．(いかがですか)

A1 は，ここで「いかがですか」，または「ございますか」の使用を考慮にいれたが，一度使うと使い続けなければならないと考え，「ありますか」に切り替えたと報告している．

さらに，こうした学習者の発話の中で，一見敬語回避のようにみえるが，実際には不適切な丁寧さを事前に訂正したものではない場合も見られる．

(接触場面 1　参加者：J1, J2, A1, A2)

A2 to J1：敬語はだんだん使われなくなってきましたけどね．

ここで，A2 は，丁寧体の「ました」，および文全体をやわらげるための，「けど」，「ね」などを使って敬意を下げ，意識的に敬語回避を行っているように見えるが，発話者は，意図的に回避したものではないと報告している．しかし，ネーティブスピーカーには，やや断定的に聞こえる表現であり，「敬語はだんだん使われなくなってきたとか(伺いましたが)．．．」のような表現を期待されるのではなかろうか．

以上のことから，外国人話者の敬語行動の特徴として，内的場面での回避のルールを，大幅に簡縮化 (simplification)[7] し，自らの中間言語の中で新しいルール(規範)を作り出してしまうことが挙げられるだろう．そのためにも，外国人話者の発話意図(意識して回避を行っているかどうか)の分析は，敬語回避の習得過程を調べる上で，不可欠な要素である．今後は，接触場面での外国人話者の敬語回避行動も十分検証する必要がある．

7. 敬語回避習得とインターアクション教育

今回の調査で，内的場面と接触場面では，ネーティブスピーカーの敬語回避ストラテジーにかなりの違いが見られることが分かった．とくに接触場面での敬語回避行動には，外国人学習者の日本語習得モデルとして，明らかに不適当なものが含まれていることが分かった．これは，それぞれの場面で適用される規範が違うことに主な原因があるが，その結果として，外国人学習者は，自らの中間言語を訂正することができなくなるおそれがある．さらにそれが学習者自身のことばの規範になり，化石化 (fossilization) してしまう場合もありうる (Selinker, 1972；Littlewood, 1984[8]；Ellis, 1988)．こうした化石化の予防，または一度化石化されたものを解く(脱化石化)(ネウストプニー，1982b) ためには，より自然な回避モデルを提示し，同時に接触場面で効

[7] 簡縮化 (simplification) については，Rivers (1983) などに詳しい．

[8] Littlewood (1984) は，外国語学習者のエラーを，学習段階によって消えていく，「一時的エラー (transitional errors)」と，エラー自体が化石化してしまう，「化石化エラー (fossilized errors)」とに分類しており，後者は学習段階に関係なく，消えることはないとしている．

果的なインターアクションや訂正行動をさせる必要がある.

それでは，敬語回避ストラテジーを，習得モデルの面からどのように指導していけばよいのであろうか．敬語回避を習得する一つの場面として，教室場面が考えられる．教師はそこで，できるだけ効果的な習得モデルを提示しなければならないが，不適当な習得モデルのインプットをいかに減らすかが課題であるといえる．そのためには，教室場面の多様化により，参加者の活発なインターアクションをさせる必要がある (Neustupný, 1977).

7-1. 教室場面参加者の多様化の意義

教室場面での参加者の多様化の意義は，そこで現われるインターアクションの種類および場面の構成と深く関わっている．つまり，参加者を多様化することは，敬語回避習得の上から，効果的なインターアクションおよび場面構成の多様化と密接に結びつく.

伝統的な教室場面をこうした多様化の観点から見た場合，複数の学習者に対し，一人の語学教師が一般的な参加者であり，教師と学生，または学生同士とハう2種類のインターアクションしか現われていなかった．さらに外国人教師の教室場面では，学習者が実際に行動する上で不可欠な，接触場面のモデルが現われず，そこで起きる敬語のさまざまな問題を観察することができなかった．これは学習者の日本語習得モデルのインプットの面からは，きわめて不十分なものであるといえる．外国人の語学教師の場合，いかに効果的な接触場面を提示できるかが今後の課題となるであろう．従来の教室場面での授業分析を研究する場合，以上のような点を今後十分考慮する必要がある.

しかし一方で，このような伝統的教室場面では，外国人教師はもちろんのこと，ネーティブスピーカーでも，一人では内的場面を構成できない点を見落としてはならない．教室場面で，内的場面を提示する効果は，敬語回避に関していえば，接触場面モデルの不適当なインプットをできるだけ低下できることにある．そのためには，ネーティブスピーカーの語学教師の場合には，一人以上，外国人教師の場合には，二人以上のネーティブスピーカーの参加者が必要になるであろう.

以上のことをまとめると，今後は，教室場面を段階的に多様化し，最終的には学習者と(語学教師以外の)ネーティブスピーカーが教室外でさまざまなインターアクション(教室場面からの脱出)ができるようにデザインしていかなければならない(ネウストプニー，1982b, 1989).

7-2. ビジターおよびティーチング・アシスタントの役割

教室場面の参加者の多様化については，これまで，ビジター制度 (ネウストプニー，1982b) やティーチング・アシスタント (ネウストプニー，1989；宮崎，1990) などが具体的に議論されてきた．これらは，ともに教室場面でのネーティブスピーカーとのインターアクションを考える上で

表 4 外国人教師の教室場面で出現可能なインターアクションと場面構成

A	2 種類	NNT-L, L-L	
B	4 種類	NNT-L, L-L	(接触場面) V-L, NNT-V
C	4 種類	NNT-L, L-L	(接触場面) NTA-L, NNT-NTA
D	7 種類	NNT-L, L-L	(接触場面) V-L, NTA-L, NNT-V, NNT-NTA (内的場面) NTA-V

A: 伝統的教室場面でのインターアクション
B: ビジターを教室場面に導入した場合のインターアクション
C: ネーティブスピーカーのティーチング・アシスタントを教室場面に導入した場合のインターアクション
D: ビジター及びネーティブスピーカーのティーチング・アシスタントを教室場面に導入した場合のインターアクション
(注) NNT: 外国人教師, L: 外国人学習者, V: ビジター, NTA: ネーティブスピーカーのティーチング・アシスタント

重要な意味をもっている. それでは, 教室場面でこのような参加者を導入した場合, どのようなインターアクションおよび場面が現われるのであろうか. ここでは, 7-1 に関連して, とくに語学教師が外国人の場合について考えてみる (表 4 参照).

ここでは, この効果に関して, 残念ながら具体的なデータに基づく議論はできないが, 教室場面に参加者を導入することにより, 学習者が接触場面でインターアクションできるようになることは間違いがない. 海外で日本語教育に携わる外国人教師は, こうした場面を積極的に教室場面に導入するようコースをデザインしていくべきであろう. しかしながら, こうした参加者の恣意的な導入は, かえって学習者に混乱をきたすおそれがあるので, 計画的にコースデザインの中に組み込んでいく必要がある. このためには, 教室場面でのさまざまなインターアクションを, 推論の域ではなく具体的なデータに基づいて調査研究していく必要がある.

参 考 文 献

杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動——「注釈」という視点」, 『日本語学』 Vol. 2. No. 7, 32-42.
田中 望, 中畠孝行, 古川ちかし (1983) 「外国人の日本語行動」, 『日本語教育』 49 号, 59-73.
ネウストプニー, J. V. (1979) 「言語行動のモデル」, 南不二男編 『言語と行動』 講座言語第 3 巻, 大修館書店.
——— (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」, 『日本語教育』 49 号, 30-40.
——— (1982a) 「敬語回避と日本語教育」, 『日本語教育』 48 号, 58-59.
——— (1982b) 『外国人とのコミュニケーション』, 岩波新書.
——— (1983) 「敬語回避のストラテジーについて—主として外国人場面の場合」, 『日本語学』, 62-67.
——— (1989) 「日本人のコミュニケーション行動と日本語教育」, 『日本語教育』 67 号, 11-24.
林 四郎 (1973) 「表現行動のモデル」, 『国語学』 92 号, 62-75.
南不二男 (1973) 「行動の中の敬語」, 『敬語講座 7 行動の中の敬語』, 16-30, 明治書院.
——— (1974) 「敬語研究の観点」, 『敬語講座 10 敬語研究の方法』, 8-38, 明治書院.
——— (1977) 「敬語の機能と敬語行動」, 『岩波講座 日本語 4 敬語』, 岩波書店, 1-29.

南不二男 (1981) 「言葉のタブー」,『講座日本語学 9』, 明治書院, 43-64.
——— (1987) 『敬語』, 岩波新書.
水谷信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」,『日本語教育』69号, 24-35.
宮崎里司 (1990) 「接触場面における仲介訂正ネットワーク」,『日本語教育』71号, 171-181.
山崎敬一, 好井裕明 (1984) 「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」,『言語』 Vol. 13. No, 7, 86-94.
吉岡泰夫 (1988) 「敬語と敬語行動—回避と習熟の実態」,『日本語学』, 28-37.

Ellis, R. 1988. *Classroom and language development*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
Hymes, D. 1972. On communicative competence. *In Sociolinguistics: Selected readings*, ed. J. B. Pride and J. Holmes, 269-93. Harmondsworth: Penguin Books.
Jernudd, B. and E. Thuan. 1983. Control of language through correction in speaking. *International Journal of Sociology of Language* 44: 71-97.
Littlewood, W. 1984. *Foreign and second language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
Neustupný, J. V. 1977. Some strategies for teaching Japanese honorifics. *Journal of the Association of Teaching of Japanese* 12, nos. 2-3: 135-47
———. 1978. Post-structural approaches to language. Tokyo: University of Tokyo Press.
———. 1985. Language norms in Australian-Japanese contact situations. In *Australia, meeting place of languages*, ed. M. G. Clyne, 161-72. Canberra: Pacific Lingustics.
———. 1990. The follow-up inteview. *The JSAA Newsletter* 10, no. 2.
Ozaki, A. 1986: Conversational analysis of foreign speakers of Japanese. Ph.D. diss. Monash University.
Richards, J. C. 1982. Rhetorical and communicative styles in the new varieties of English. In *New Englishes*, ed. J. B. Pride. Rowley: Newbury House.
Rivers, Wilga M. 1983. *Communicating naturally in a second language*. Cambridge: Cambridge University Press.
Selinker, L. 1972. Interlanguage. *IRAL* 10: 209-31.
Skoutarides, A. 1986. Foreigner talk in Japanese. Ph.D. diss. Monash University.